静岡発 こう読む

ガバナンスの言葉をめぐって

▶▶▶加藤裕治

今月初頭、政府の総合科学技術・イノベーション会議が、「世界と伍する研究大学」を実現するため、十兆円規模の「大学ファンド」の制度設計を含めた最終案を取りまとめている。

発表された最終案の内容は多岐に及ぶが、「国際卓越研究大学（仮称）」として認定されると、ファンドからの助成を含めた総合的な支援が実施されるという。では、どのようにこの大学は認定されるのか。第一の要件として「自律と責任あるガバナンス体制」の確立が明記されている。具体的には、過半数以上の学外者を招いた合議体を設置し、大学を「モニタリング」しながら、重要事項を決定せよ、ということのようだ。これを読み、制度論の専門家でない私が、まずつまずいてしまうのが、資料に頻出する「ガバナンス」の意味なのである。検索すれば、統治、支配、管理などが訳語として挙がる。しかしそれらの単語は、大きく意味が違う。語感としても統治であれば、まあ中立的だが、支配や管理では威圧的だ。統治、支配、管理、どの訳語でガバナンスを理解すれば良いのか。

こうした時、語源を調べると理解が進む時がある。ガバナンスの語源は古代ギリシャまで遡ることができ、「船の舵取りをする」という意味なのだという。

さらに学生時代の記憶を紐解き、フランスの思想家M・フーコーの「統治性」という文章を読み直してみた。すると、この言葉は歴史的に、「気を配る＝ケア」という意味で理解された経緯があるというのだ。

船の舵取りとは、悪天候や風、岩礁に注意し、積み荷に責任を負い、そして何より船で働く船員たちへの責を負うことになる。だから舵取り＝統治（者）は誰よりも「忍耐、智慧、勤勉」をもって、人と物に気を配らなければならない。フーコーを読むと、ガバナンスとは、統治（者）側の責任と倫理を問うものであることがわかる。

先の制度も含め、ガバナンスという言葉はよく見かけるが、「気を配る」の面は意識されているだろうか。要注意の言葉である。

（静岡文化芸術大学教授）

2022年2月13日
中日新聞（朝刊）P.5